令和5年度 あしたのまち・くらしづくり活動賞　総務大臣賞受賞

閉校した小学校舎を活用した地域拠点づくり

愛媛県内子町　みそぎの里運営協議会

秋の稲木干しの風景の向こうに見えるみそぎの里

御祓地区は、愛媛県内子町の山間にある、人口230人ほどの集落。「みそぎの里」こと「旧御祓小学校」は、2014年3月に閉校した地域に唯一の小学校。学校行事は地域みんなの行事、いつでも御祓の中心はこの小学校にあり、地域の方たちにとっては特別に思い入れのある場所だ。

閉校の3年後から旧職員室を活用した月に2回のカフェ事業が始められ、うどんとコーヒーの提供をするも、営業日に来るお客さんは1日10人にも満たない現実の中、地元有志の女性たちが試行錯誤していた。

2019年2月、地域おこし協力隊の着任をきっかけに、メニューを見直すことに。

御祓地区は、生きた里山の風景が広がる地域。そんな地区でありながら、当初のカフェでは地元産のものを使うわけでもなく、地域の産物たちは当たり前のものすぎて見過ごされていた（田舎あるある）。しかし、自家産の採れたて季節野菜を使って日々食事を作っている“当たり前”こそが、他所の人から見たら何よりも魅力的！この背伸びしない“当たり前”の食卓をカフェで提供できたら、わざわざここまで足を運んでもらう価値になるのではと、2019年5月にリニューアルオープン。

メニューを営業日ごとの日替わり「季節の定食」一択にし、毎回そのタイミングで採れる食材を使った献立で、何度来ても楽しんでもらえる形に。リニューアルの甲斐あり、1日あたりのご来店数は平均して以前の4倍以上、たった3時間の営業時間に40～50人ものお客さんが来店するように変化。定食とともに、カフェの中で展開した野菜の直売もリピーター客の目当てになるほど喜ばれている。

直売の野菜は”安くて新鮮”とファンが多い

ある日の季節の定食

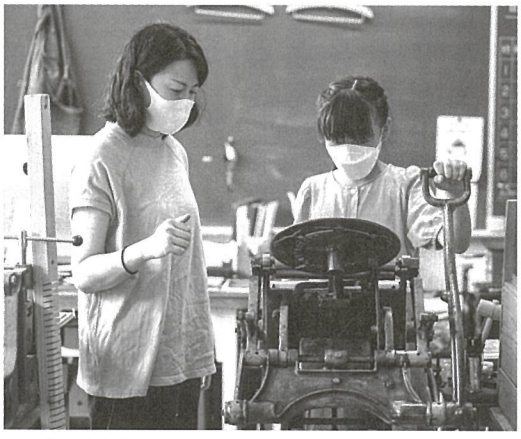
食事提供の体制が整ったことで、イベントや集会などの食事作りの依頼も来るようになった。そうしたイベント時やカフェ営業日には御祓内外の方たちで賑わい、ようやく「コミュニティースペース」の名にふさわしい場が出来つつあった。そんな中訪れたコロナ禍にはヤキモキしたものの、新たに地域内での宅配食サービス事業を始めるきっかけとなり、月に一度、地域の独居の方や高齢者など希望者を対象に、カフェで作ったお弁当を配達に行く取り組みも始めることができた。

２０２１年からは、飲食事業に加え校舎全体の活用にも着手。それまでは月に2回の営業日に、旧職員室の一室しか活用ができておらず、その他の教室を持て余していた。”教室を使ってみたい“という個人の事業者から声をいくつかもらい、運営の母体となる「協議会」の立ち上げとほぼ同時に、四つの教室の活用を開始。

教室活用の仕組みとしては、＜家賃なし、共益費月額３０００円、光熱費ネット込み＞という破格の利用料で借りられる代わりに、地域活性化の拠点であるこの施設で、校舎の運営を共同で行いながら、地域に還元できるような活動をすることが条件。

地域には、圧倒的に若手が足りない。行事ごとや、田んぼや畑をしている（＝御祓の風景を作り上げている）人たちは、ほとんどが

住民の日々の作業により風景が作りあげられる


図工室は和紙専門の印刷所に、など元の教室を活かした活動が展開される

イベント時に賑わう教室

元家庭科室は自家焙煎の珈琲屋さんに

引退世代の方たちだ。元々地域に若手が全くいないわけではないものの、働き手世代の人たちは、住まいが御祓であっても外に仕事に出ていて地域の中で過ごす時間は少ない。そうすると当然ながら、地域のことは自分ごとになりにくい上、地域のために動く時間を取ることも難しい。

どうにか地域の中で、それも御祓小学校を舞台に働ける環境が作れないか、そう考えた結果、格安の固定費という個人の事業者にとってこの上ない条件を作ることで、（半ば強制的に）地域の一員として地域を自分ごととして捉え、力を割いてもらう、そんな「仲間を増やす仕組み」を作りあげた。

幸運なことに、当初入った事業者がとても魅力的な活動をされていることもあり、取り組みをはじめてから約1年で、募集をかけずとも計11組の事業者が教室の活用に励んでいる。旧校舎という一つの建物の中で素敵なお店をいくつも回れるということから、〝文化祭みたい〟〝私たちも仲間に入りたい〟という声もあり、実際に参入を決めた家族がいたりと、まさに「面白いことをしている場所には自然と人が集まる」を体現する状況だ。地域の方たちが大切にしてきたこの場所を、形を変えながらでも、変わらず人が集い賑わう場所として生かし続けることが、いま地域の活力となっている。

「みそぎの里」の変化と進化とともに、この数年間で地域には7世帯10名の移住者が定住。さらにそのうちの2家族は昨年それぞれ新たな命を授かり、地域としては7年ぶりの子どもの誕生。〝閉校〟という寂しさと、〝賑わいを取り戻す〟ための苦悩の先に、御祓の真ん中＝校舎から描ける未来が広がり始めている。昨年生まれた子どもたちが大人になるまで、そしてその先も、「みそぎの里」の存在が物理的にも精神的にも、地域にとっての拠り所であり続けられたらと願う。

（みそぎの里運営協議会事務局　熊野円香）

みんなで盛り上げていきます